

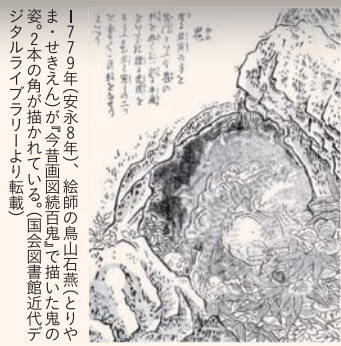
熊野の  
オモいから

# 怪熊野

其の(一) 「鬼(其の一)」



和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授



1779年(安永8年)、絵師の鳥山石燕(とりやま・せきえん)が、今首画(うしろび)「女鬼」で描いた鬼の姿。その角が描かれている。国会図書館近代デジタルライブラリーより転載

天狗(てんぐ)と並んで有名な怪異に「鬼」がいる。桃太郎の話は誰でも知っているし、節分では子どもたちに退治され続けている。英語では、なんとデーモンと訳すことが一般的だそうだ。もともとは、オヌ(隠)が転じた語で「姿の見えないもの、この世ならざるもの」を意味する言葉。オヌと呼ばれるようになる平安末期頃までは、怪異を引き起こす存在はモノと呼ば

れ、その姿は不定だった。よく知られた鬼の特徴として、角や牙(きは)がある、皮膚の色は赤や青である、力が強い、集団化している、などがあげられる。江戸時代になり、一般書として鬼の絵姿が広く流通するようになると、その特徴はさらに固定化される。ところが、鬼の性格には個体差があり、強欲で粗暴な鬼がいるかと思えば、人情家の鬼も、気弱な鬼もいることがさまざまな伝承で語られている。まるで人間社会での個人差のような感じである。

鬼は、あまりにも有名な怪異であり、さまざまな研究がなされている。修験者集団説、異民族説、犯罪者集団説、戦での敗残民説などがあり、人が変じた化けモノあるいは人そのものだという説が展開されることが多い。例えば、桃太郎の鬼を「あっちの人」と仮定するなら、「こっち」との争い(い)の物語となり、戦利品は補償だと理解することもできる。鬼の顔が赤いのは



都から遠く離れた紀州の地は、鬼が闊歩(かっぱ)する「鬼州」だったという説がある。差別的な表現にも感じるが、紀州には鬼州の名に通しても不思議ではない荘厳な雰囲気がある。

白人の血が入っているからだ、いや、吉備の国(岡山)の桃太郎は日本海を渡って白人の住むロシアに攻め込んで勝ったんだ、これなら生活様式や文化の違いも説明できる、という話まである。興味深い話ではあるが「あっち」と「こっち」の争いという単純な話だけで鬼はここまで有名な存在になったのであろうか？

鬼を恐ろしいモノ、人、コトの総称だという考えもある。例えば、南方熊楠は、果無(はてなし)の「肉吸い」を鬼と表現している。「肉吸い」は人を喰(く)らう鬼女であるが、角は生えていない。また、紀州の語源は鬼州ではなかったのかと考える人もいる。都から遠く離れていることで、独特の民俗を展開した紀州への畏怖や畏敬、時には一種の差別が鬼州の地名につながったという話だ。ムツとする話でもあるが、ゴロ合わせ話としては面白い。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授、19年から教授、51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

